

# 山に植えた木、大きくなあれ。 僕らも負けずに大きくなるぞ。

穴をほる人、苗を植える人の姿が

あたり一面にちらばっている。

私はお母さんに代わって穴をほった。

木切れや、ほった石ころが

ころげ落ちないように用心してほつていった。

皆んな、たった一本のひのきの苗を、

いっしょけんめいに植えている。

その姿をみると、私も負けてはいられない。

私は植えたりほつたりでなかなかいそがしい。

その日は寒かったのに、

あせが、ほおをつたわって流れていくのを感じた。

大部分の穴は、お母さんに

ほつてもらったが、私も七つばかりほった。

なんといつても植林するところは山だ。

平たい所などここにもない。

どこを見ても急な所ばかりだ。

そんな所に穴をほつたり苗を

植えたりするのは、簡単なものではない。

皆んながそろってから、

今植林したばかりの山を見回すと、

まだ植えていなかっただはじめの山とは思えないくらいいっばいになっていた。

これから先、私たちの心は、

体とともに大きく進歩していくのだ。

まるで、この山に植えたひのきの苗のように。

(卒業生作文より)



## やった! 日本の学校林だ。

湯前町 湯前小

球磨郡の湯前小学校は、学校林づくりを大正三年から七十四年間も続け、植林活動を通じた学校教育をすすめている学校です。昨年五月には緑化推進功労者として内閣総理大臣賞の表彰を受けました。木を植え、育てる過程の中で子供たちは働くことの大切さ、厳しさを学ぶだけでなく、自然とのふれあいを大切にすることを、思いやりの心を学びます。また、植

林は必ず父兄同伴で行われるので、親子は一緒に汗を流し、共通の喜びを味わいます。一本の苗木には親子二代の血がかよっているのです。

『学校植林は決勝点のないレースである』

というスローガンのもと、親から子へと受け継がれた植林は、杉・桧を中心として四十九haにも及び、ふるさとの林としてしっかり根をおろしました。

今年三月、卒業生八十名が植林をした所は、学校から車で約十分。それから急な山道を二十分あまりも登った、山の急斜面にあります。生徒会の五人の子供たちとたずねてみました。

あいにくの小雨の中、息を切らして、

つづら折りの山道を登りつめると、急に視界が開けます。山頂近く、〇・五haの斜面には、千五百本の杉の苗木が、行儀よく並んでいます。なかなかの壮観です。

子供たちに感想を求めてみると、「僕らも早く自分達の木を植えたい」という声

が、異音同音にはね返ってききました。来年三月の、記念植林が待ち切れない様子です。

今度は、大先輩の学校林へ。これはすごい。子供三人でやっと囲めるほどの杉の大木がうっそうと繁る林。幹は苔むし、

萬がからんでいます。

「すごい」

「僕らもこんな大きな木を育てたいなあ。」

「幹には苔のはえとるぞ」

「七十年もすると、こんなになるんだね」

「その頃は、もう僕らはじいちゃんたい。」

「生きたっかわからんぞ。」

「それ」

「それは大変な騒ぎになつてきました。」

最後に、彼らはパッチリと決めて

くれました——。

「やった!僕らは森づくり日本一だ!」



湯前小学校